

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720035

研究課題名 (和文) イタリア・カラブリアの舞踊音楽研究
——地域文化としての民俗芸能の観点から——

研究課題名 (英文) Study of Dance Music in Calabria (Italy)

研究代表者

金光 真理子 (KANEMITSU, MARIKO)

横浜国立大学・教育人間科学部・講師

研究者番号：40466941

研究成果の概要 (和文)：本研究はイタリア南部の民俗芸能を対象とし、その音楽・舞踊の構造や美学を地域文化の一環として読み解くものである。フィールドワークに基づき、複数の村(地方)の音楽・舞踊の比較分析を行った結果、第一に民俗芸能へ昇華された身体表現・コミュニケーションの存在、第二にその地域性(村ごとの独自性)、そして第三に民俗芸能研究に不可欠な「伝統」概念の多義性を明らかにした。とくに「伝統」概念に関しては、複数の主体(エージェント)の異なる視点を想定した、新たな解釈の枠組みを提起した。

研究成果の概要 (英文)：This study aims at revealing a structure and an aesthetics of **folk dance and music** as a part of local culture in southern Italy. Based on fieldwork of the dance and music styles in several communities and regions, this comparative analysis reveals three things: first the body expressions and communications stylized in the folk dance and music, second the locality or local variety of them, and third multiple representations of “tradition,” the indispensable concept for folklore studies. I also propose a new approach to interpret the concept of “tradition” from different gazes of multiple agents.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学、イタリア、民俗芸能

1. 研究開始当初の背景

申請者は、イタリアのラウネッダス音楽の研究を通じて、地域社会の伝統に根ざした民俗音楽を理解するには音楽を地域文化全体

の中に位置づけて検討することが不可欠であり、舞踊や詩など地域文化の他の要素との関係から再帰的に分析することで初めて音楽の構造や美学を十全に理解できることを

実証してきた。すなわち、民俗音楽の研究では、ただ記譜された音（楽譜）を分析するばかりでなく、フィールドワークによって音楽が実際に演奏される現場で音楽を多角的に観察し、分析・考察することが重要になる。

上記のようなアプローチに従って、本研究ではカラブリア州を中心とするイタリア南部の民俗芸能へ対象を拡げ、その舞踊・音楽を地域文化のコンテクストに鑑みながら分析・考察することを趣旨とした。このように民俗芸能を地域文化の一環として読み解くことによって、舞踊や音楽など個別の分野に特化した従来の先行研究を批判的に乗り越えることをめざした。

2. 研究の目的

本研究の狙いは、第一に、地域文化と深く結びついた、イタリア南部の舞踊・音楽の固有の価値を構造や美学の分析・考察から明らかにし、イタリアの民俗芸能の独自性そして多様性を実証することによって、民族音楽学を始めとするイタリアの音楽文化研究へ資することにある。そのため、年間のサイクルを通して行われる祭りの舞踊のなかでもとくに伝統的なスタイルの、ザンポーニャ（イタリア南部のバッグパイプ）による舞踊を対象とし、複数の村の様式の比較分析を試みた。フィールドワークを通して、コミュニケーションや自己表現をめぐる地域社会の美的価値観がいかに関与しているかを読み解くことによって、それぞれの舞踊・音楽の構造や美学の特性を解明することを目論んだ。

第二に、このイタリア南部の事例研究を通して、民俗芸能を地域文化という観点から分析・考察する有効性を実証し、民俗芸能研究の新たな枠組みを提示することにある。イタリアのみならずヨーロッパの民族音楽学にとっても有意義なアプローチを提起することを念頭に置いた。

3. 研究の方法

本研究では、フィールドワークを重視する立場から、実際にザンポーニャが演奏され、舞踊が踊られる現場でのパフォーマンスに焦点を当て、踊り手同士のやりとり、それに対する演奏者の反応そして観客の評価等、場を成立させている複数の要素を相関的に分析・考察することを重視した。そのため、2008年夏期と2009年冬期の二回、各2～3週間ずつカラブリア州他の複数の村（アルビドーナ村、アレッサンドリア・デル・カレット村、サン・コスタンティーノ・アルバネーゼ村、テラノーヴァ・ディ・ポッリーノ村、テアーナ村）で調査を進めた。

具体的には、音楽・舞踊のパフォーマンス全体を参与観察し、ビデオで記録するととも

に、踊り手や演奏家へのインタビューを行った。また、身体的な感覚やコツを理解するためにも、みずからもザンポーニャの演奏法と舞踊のステップとを学んだ。この学びのプロセスを通じて、より現地の人々に近いレベルで音楽・舞踊を会得するばかりでなく、説明や注意の言葉から、演奏家／踊り手自身がいかに音楽／舞踊を理解し、何を重視しているか等、彼らの美的価値観を見極めることをめざした。

国内ではこうして蒐集したデータを基に分析・考察を進めた。舞踊・音楽の形式的な分析と当該共同体の慣習・価値観の考察との二つを中心に行った。

4. 研究成果

本研究の基礎となるフィールドワークでは、貴重な分析データの蒐集と同時にその過程で今後の考察の方向性を決定づけるいくつかの要素が明らかになった。大きく分けて、音楽・舞踊の様式分析に関わる、よりミクロなレベルの要素と、民俗芸能の概念ないし解釈に関わる、よりマクロなレベルの要素の二つがある。前者に関しては、第一に民俗芸能へ昇華された身体表現・コミュニケーションの存在、第二にその地域性（村ごとの独自性）が重要な論点となることが判った。他方、後者に関しては、民俗芸能と不可分な「伝統」概念の多義性を指摘し、複数の主体（エージェント）を想定した解釈の枠組みをあらたに提起した。以下、上記三つの成果について、より詳細に述べたい。

（1）民俗芸能へ昇華された身体表現・コミュニケーションの存在

フィールドワークでは地元出身の研究者（ミラノ大学講師）スカルダフェッリ氏を始めとする協力を得て、カラブリア州とバジリカータ州に跨る五つの村で舞踊・音楽の記録およびインタビュー調査を行った。

対象とする舞踊・音楽は一般にタランテッラ *tarantella* という総称で言及されるが、今回の調査から、むしろパストラレー *pastorale*（あるいはパストゥラーレ *pasturale*）という呼称が伝統的に用いられていること、また各村・各行事によって異なる名称で呼び分けられていることが判った。つまり、全国レベルの（イタリア北部からみた）言説とは異なる認識の伝統があり、その認識のありかたは舞踊・音楽を全体として把握する抽象概念というよりも、そのコンテクストの個別の行事と結びつけて理解する具体概念により近いといえる。

事実、舞踊・音楽が行われるのはもっぱら各種の祭りであり、いつ・どこで・誰が・何を・どのように踊るか／演奏するかという諸要件は祭りのコンテクストによって変わっ

てくる。とくに重要な祭りの一つであるカーニバルの場合、その高い演劇性ゆえに、参加者（踊り手・演奏家）のパーソナリティや舞踊・音楽を通じての一連の行動がコミュニティにとって意味・意義のあるものとして認識されていることが、アレッサンドリア・デル・カレット村とテアーナ村で行ったインタビューや参与観察から確認された。

このように舞踊・音楽をコミュニティにとって意味のある身体表現・コミュニケーションとして理解・解釈していく可能性は、次の地域性ないし各コミュニティの独自性とあわせて、ケーススタディを積み重ねていく必要がある。

(2) (1) の地域性 (村ごとの独自性)

複数の村の舞踊・音楽を調査するうちに明らかになったのが、近隣地域ながら、呼称ばかりでなく、ステップや踊り方の点でも各村の舞踊のスタイルがかなり異なることである。ただし、音楽に関しては、各村の演奏様式の違いというよりも、個々の演奏家の個性として語られることが多く、また演奏家の活動範囲が一つの村に限定されないことから、地域性と個性のどちらに帰するかは今後の検討課題である。もっとも、本研究で舞踊と音楽の相関関係について分析モデルを示したように、舞踊と音楽には密接な関係があり、ある程度は地域性の観点から分析できると考えられる。その仮説を裏付ける事例として、分析・考察を継続していく予定にあるのが、アルバニア系移民の村であるサン・コスタンティーノ・アルバネーゼ村（以下、サン・コスタンティーノ）の舞踊・音楽である。

今回の調査の結果、サン・コスタンティーノの舞踊・音楽は、その他四つの村のものとは比べて、第一拍目の強調が目立ち、二拍子の拍節感が優位な一方で三拍子（三連符）の拍節感が希薄であることが判った。この拍節感は、イタリア南部のその他の地域のタランテッラも含め総合的に判断しても、よりアルカイックな特徴と考えられる。サン・コスタンティーノの楽器の状況（より古いタイプのザンポーニャであるスルドゥリーナの中心地であること、リズム楽器のタンバリンが伝統的に使用されてこなかったこと）も、舞踊・音楽の独自の歴史の裏づけになると考えられる。したがって、引き続き調査を継続し、インタビューや歴史的な録音資料の分析などを進め、その実態と他の村々の様式との関係を解明していきたいと考えている。

(3) 「伝統」概念の多義性

民俗舞踊・音楽研究において不可欠なキーワードであると同時に現地でも少なからず耳にする言葉が「伝統（伝統的）」である。「伝統」概念に関しては、ホブズボウムとレンジ

ヤーの「創られた伝統」論 (Hobsbawm and Ranger 1983) 以来、「創出 invention」という観点から、その実態（とくに近代の国民国家による創出）を暴露するアプローチが主流であった。しかし、イタリア南部のように、伝統芸能が慣習として綿々と受け継がれてきた、「創出」には該当しないケースの場合、現代社会に生きる「伝統」をいかに把握し考察していくかは芸能それ自体の理解を左右する重要な課題になる。

フィールドワークを通じてインタビューを重ね、筆者が確認したのは、伝統(的)という言葉の代わりに使われる表現パターン（「古い」、「オリジナルな」等）の存在である。そこで筆者は当事者が「伝統(的)」と判断する要素は複数あり、その立場や関心によって、また主張する相手によって使い分けられているのではないかと仮説をたてた。この仮説を基に調査を行い明らかになったのは、文化の中の主体（エイジェント）によって「伝統」に対する観点も変わるという現象である。

サルデーニャの事例を中心とした論考では、「多義的な伝統」という新たな解釈の枠組みを提起した。すなわち、「伝統」概念に「エスニシティ」、「オーセンティシティ（正統性）」、「芸能大系の伝承」の三つのコンテクションの可能性を指摘し、多義的な解釈の必要性と方法を論証した。国際大会の発表ではヨーロッパの研究者他からケーススタディとして高い評価を受けることもできた。そこで、イタリア南部の舞踊・音楽に関しても、この枠組みをベースに、複数のエイジェントに注目した多角的な視点から分析・考察するアプローチをとり、現代社会における民俗芸能の在り方を考えるグローバルな研究へと発展させていくことを視野に入れている。

以上に述べた三つの成果は、イタリア南部の舞踊・音楽についてはヨーロッパの民俗芸能の基礎研究として重要なデータになると考えている。このデータを活かした研究の発展が次のステップとして必要であり、分析・考察の精度をより高めていく予定である。そのため、フィールドワークを継続し、より多くの協力者を得ながらデータを蒐集することで、各村の舞踊・音楽の様式的特徴を定量的に分析していく。その結果を地方様式の比較研究として学会のみならず現地へも還元していきたい。

他方、グローバルな視点で民俗芸能研究を発展させていくためにも、本研究をイタリアのその他の地域を始めヨーロッパの伝統芸能研究の中へ位置づけていくことを常に検討している。共同研究の可能性も含め、学会での口頭発表・論文投稿を積極的に行っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①金光真理子、伝統の多義性——イタリア・サルデーニャ島の音楽文化を例に——、横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ(人文科学)、査読無、12巻、2009、13—22

②金光真理子、サルデーニャ舞踊における音楽と舞踊の相関関係、舞踊學、査読有、第31号、2008、10—21

[学会発表] (計2件)

①金光真理子、Multiple representations of “tradition” in case of the Sardinian launeddas music、International Council for Traditional Music、2009年7月4日、クワズルナタル大学(ダーバン・南アフリカ)

②金光真理子、高松晃子、長尾洋子、横井雅子、ラウンドテーブル「現代に棲処を得る——伝統芸能の“再文脈化”」において「広場、ローカリティ、アイデンティティ——サルデーニャ民俗舞踊団にみる伝統意識」、日本音楽学会 第59回全国大会、2008年10月25日、国立音楽大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金光 真理子(KANEMITSU MARIKO)
横浜国立大学・教育人間科学部・講師
研究者番号：40466941

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：